

新潟県内にとどまらず、遊んでくれる人々がいる。そういう得がたい場所のひとつが十日町市浦田集落である。合併前は松之山町だった。

といつても、本当に遊ばせてもらっている感覚である。ボランティアというのも恥ずかしい。しかしここでは行くたびに何らかの発見がある

# 時々草々

「グリーンハウス里美」という民宿に泊まり、東京など他地域からの人々にまじって、年に数回、棚田の仕事を夫婦で手伝わせてもらっている。

正確には手伝うというほどのことはしていない。苗代づくりや田植え

越智 敏夫 (新潟国際情報大学 国際文化学部 教授)



## 縛られず動いてこそ

で行っているような人間である。ひどいときには飲み会だけ参加することさえある。それがむしろは気に入らなかつたらしい。

た。先に書いたように、こちらは作業後の温泉とビールとはか話が楽しく

その日、私たちが稲を刈った面積が狭いと宴席の場でなじられた。それ

務感でやっているのではない。ましてやノルマを強制されるおぼえはな

しまった瞬間に、それらの作業はなにかしら高尚なものに変質し、働く人間を縛りはじめ

おち・としお 1961年愛媛県生まれ。立教大学法学部卒。慶応大学大学院政治学博士課程修了。96年、新潟国際情報大学講師。2006年に教授。専門は現代政治学理論。

しかし主張自体は今でもまちがってないと思う。5分間の稲刈りであっても、それが誰かから押しつけられた瞬間に苦役となる。また「山間地域の棚田を守らねばならない」と義務感をもって

初から放棄しているからこそ、自分から楽しく働いているのだろう。当然、そうした外部の者を受け入れてくれる浦田の人々の寛容さも特筆すべきことだ。ちなみに、そのけんかした相手は浦田に来なくなった。若干反省してま

浦田に集う人々は「誰かの役に立つ」という観念を最初から放棄しているからこそ、自分から楽しく働いているのだろう。当然、そうした外部の者を受け入れてくれる浦田の人々の寛容さも特筆すべきことだ。